

グーツムーツの遊戯論 (その1)

—『遊戯書』における遊戯思想と教育的
基礎づけ—

(保健体育研究室) 森 田 信 博

GutsMuths' Theory about Plays and Games
(No. 1)—His Through and Educational Foundation in
"Gamebook" —

Nobuhiro Morita

I. はじめに

体育史の上で、遊戯の十分な研究と実践を試みたことは、ベルネット (Bernett, H) も言うように、近代体育の基礎をなし、遊戯の教育的及び体育的有用性を認識し、体育実践に活用した汎愛派¹⁾ (Philanthropen) に見て取ることができる。²⁾ その汎愛派の教育運動を理論的にも実践的にも確立し、「近代体育の父」と称されるグーツムーツ (Johann Christoph Friedrich GutsMuths. 1759. 8/9 ~ 1839. 5/21) は、特に遊戯にも関心を寄せた。『青少年の体育』 (Gymnastik für die Jugend. 1793) を彼の第一の主著とするならば、第二の主著と評価されるのが、通称『遊戯書』³⁾ (Spielbuch. 1796) と呼ばれるものである。⁴⁾ 『遊戯書』は、単に青少年の体育の補遺という意味を越えて、18世紀後半の「老朽化した中世的教育の理論と実践への決定的批判」⁵⁾ であると同時に、経済的向上を努め、社会指導的地位を目差そうとしていた新しい時代の担い手であった中産市民階層の子弟の育成のための遊戯の教育的有用性を述べたものであった。汎愛派がめざした「繁栄社会」を形成し、発展させていく青少年の身心の発達を促進させる様ざまの遊戯の理論的認識とその実践のためのものであった。

というのは、当時は、まだ身体的教育の重要さや必要さが十分に気づかれず、軽視ないしは無視する学校や家庭教育が一般的であり、「力 (Kraft) や器用さ (Gewandtheit) の不足は、市民社会に無限に多くの問題を引き起こし、病気や身体的忍耐力の不足は、まさに我々市民の教養人を悩ませる。文化界の教養人階層の非常に重苦しい病は、無気力で、安楽癖であり、身体的努力に対する嫌悪である。」⁶⁾ と、グーツムーツが厳しく時代批判を加えるような状況であった。彼にとって新しい時代に求められるものは、「誠実さや信頼、強靱な性格、ゆるぎない愛情、楽しさや勇気や男性らしい意識」⁷⁾ であり、これらのものが十分に獲得される事を妨げているものは、時代の文化ではなく「身体教育 (Körperliche Erziehung) の無視、青少年の力強さの不足や無気力で甘やかされた生活法」⁸⁾ であるとして、青少年期の身体運動や遊戯による教育が、いかに必

要であるか、そして「勤勉でたくましい市民」「忍耐力に富み行動力のある市民」の育成にいか
に意味を持つかを述べている。

本研究は、それ以後の遊戯教育のみならず遊戯研究に大きな影響を与えたグーツムーツの『遊
戯書』を手がかりとして、その思想と教育的に有用性を持つ遊戯の役割、方法を中心に、グーツ
ムーツの遊戯論を明らかにすることを課題とする。

II. グーツムーツの遊戯思想

1. 遊戯の概念規定

グーツムーツは、遊戯の概念規定を展開する際に、スエトニウスの遊戯書以来に無数に及ぶ遊
戯書が著わされていることをあげ、それらを大別すると、一方は、哲学的・一歴史的な観点に立っ
て叙述されたものであり、他方は、実践的観点に立って叙述されたものに区別されることを指摘
する。⁹⁾

その基本的な区分に立ち、グーツムーツは『遊戯書』において、ヘーネ¹⁰⁾ (Höhne, E) やマル
シュナー¹¹⁾ (Marschner, P) やベルネット¹²⁾ (Bennett, H) らが指摘しているように、遊戯の
「哲学的基礎づけ」や「理論的一般化」を主要意図とはせず、教育的に有用な遊戯を収集し、個
々の遊戯の教育的価値と実践する方法を指示することを課題としたことは確かである。¹³⁾ しか
しグーツムーツは遊戯の理論的な基礎づけを全く放棄してしまった訳ではなく、彼は遊戯の概念
規定を試みる時に、次のような立場を考えた。一方「厳密な意味での遊戯」¹⁴⁾ (Spiele im strengen
Sinne) で、哲学的な立場の概念規定であり、他方は「習慣的な意味での遊戯」¹⁵⁾ (Spiele im gew-
öhnlichen Sinne) で、実践的な立場での概念規定である。このような立場を明らかにしている
が、彼は、「厳密な意味での遊戯」の概念規定を、次の理由から避けようとしている。すなわち、
「厳密な意味での遊戯」においては、遊戯者は、「活動の自由な働きにおいて喜び (Belustigung)
を楽しむという他には目的を持たない」¹⁶⁾ と考え、グーツムーツの主要意図からそれと結論づけ
たためである。そして同時に、美的な大きさ、即ち美的な形態と形姿から形成されるような遊戯
の存在を否定するものであり、もし美的な形態と形姿をもったものがあっても、それはあくまで
も、単なる暇つぶしであり、けっして遊戯とは呼ばないのが通常であると考えた¹⁷⁾ からである。

グーツムーツのこの見解は、シラー (Friedrich von Schiller) の『人間の美的教育について――
連の書簡一』における遊戯概念を批判したものである。¹⁸⁾ グーツムーツは、遊戯を内容のある、
実質的なものとして捉えようとしたために、つまり遊戯を教育的手段に適合させ、そのために有
用な内容を持たせ、体系的な秩序において整理される必要があったために、実はシラーの遊戯概
念を十分に理解せず、誤解から批判をすることになったのである。ノイエンドルフ (Neuendorff,
E.) が述べているように、シラーが天才的直観で、美と遊戯を関連させたり、遊戯衝動という概
念を哲学的に深まった意味で用いたことを、ほとんど理解せず、従ってそのことについて論究し
ようとも考えなかった、¹⁹⁾ のである。

しかしグーツムーツは、『ホーレン』には非常に熟考された論文が見られることと言及している
ように、そのことに無関心ではなく、「有用性」 (Nutzen) が、シラーにとって、時の理想であ
ったと同様に、グーツムーツにはそれが偶像 (Idol) でもあったことなど、グーツムーツの遊戯
の思想的背景にはシラーに負うところが多く見られることも確かである。

そこでグーツムーツは、「習慣的な意味での遊戯」の概念規定を展開する。まずグーツムーツ
は、休養 (Erholung) があらゆる遊戯の際の最とも合法的な目的であり、それは睡眠や食事
などと同じ様な欲求であると考えた。そして「活動の自然な衝動が遊戯の創造者」²⁰⁾ であると

して、これは教養や文化程度や個人の洗練の程度に従って様々な遊戯となつてあらわれてくると考える。グーツムーツは人間の「活動衝動」(Tätigkeitstrieb)と「休養」(Erholung)の二つの側面から遊戯の概念規定を行なおうとする。そしてそのより具体的な目標として、「退屈さ(Langweil)に対する娯楽(Unterhaltung), 身心の属性の獲得(Gewinn), そして労働からの休養」²¹⁾を挙げている。

退屈さを感じる者は、楽しもうと努める。彼は、ただこの目的だけであらゆる種類の遊戯を、彼の好みで時と場所を結びつけて遊戯を決定することになる。ここには、決して決定のための一般的な規範はないのだが、退屈さは、活動的な人間の生活には存在しないし、全く同様に教育にも属さないと思はれる。従つてこの思考は、当時の社会状況や、上流階層の不活動さや変化のない一定の生活法への批判をこめて、退屈さが遊戯を行なわせる誘因となり、退屈さをまぎらわすのに望ましいものが遊戯であると考えた。

また身体の形成や強化と精神の完成化の獲得には、多くの座遊戯(sitzende Spiele)と同様に運動遊戯(bewegende Spiele)が有効な働きをなす。たしかにそれらの遊戯だけでは、様ざまの遊戯種目を適切に用いることを決定されないが、遊戯を導く要因であると考えた。

労働からの休養について、グーツムーツはこの休養が、遊戯の際の最つとも重要で主要なものと考えた。休養は人間の自然の欲求で、精神的な労働と身体的な労働のまじめな労働に対する交代に基づく。特に青少年が、絶え間ないまじめな精神的、身体的労働に従事した後は、こと休養が有効な意味をもつと考えた。

以上のように目的論から遊戯を捉えると「退屈さ」や「獲得」が誘因となり、「休養」が主目的であると考えられる。休養は、特に青少年に必要であり、祖国の数100万人の青少年が1日2時間遊戯が行なえる休養があれば、どれだけ人間的な時が過ごせることか、²²⁾と彼は考えた。

そしてこの「休養」において求められるものは、「楽しみ」(Belustigung)である。「楽しみ」を生み出す遊戯の条件となるものを三つ挙げている。²³⁾1つは、活動のための十分な興味づけが持たれる用具などの物質的なもの(Materielle)であり、2つは、例えば卓越した名誉心などの活動を刺激する興奮(Affekt)であり、3つは、緊張を生み出す偶然(Zufall)であり、これらによって期待が広げられ、活動が生き生きと保たれる。

更にグーツムーツは、遊戯にともなう気晴しは、活動にだけ存在するのではなく、遊戯の形態の静観、すなわち活動の協定された秩序にもあると考えた。そこでグーツムーツは「習慣的な意味での遊戯」における概念規定を次のように述べている。「遊戯は、我々の活動の協定された形態や活動的なことから汲み取られる休養のための楽しみである。」²⁴⁾

この定義は、今日では、満足されるものではなく、数多くある遊戯説の一つに挙げられるに過ぎない。その理由として、グーツムーツが、様ざまの遊戯の現象形態の解釈と社会的状況に基づいて実践可能な方法論を求めるあまり、遊戯の本質の基づけや哲学的に確固たる規定をすることが妨げられたと考えられるからである。

しかしその一方で、時代的に、いくつかの先取りの考察を行っていることを評価できる。例えば、人間と動物の遊戯を同一視し、質的な差異をまったく考えていない点である。「すべてのものが遊戯する。人間とその子供だけではなく、動物とその子、水中の魚、犬、馬、ライオンそしてそれらの子も遊戯する。」²⁵⁾

またグロース(Groos, K)やビューラー(Bühler)による心理学的把握をすでに先取りし、ビューラーのように有機体に条件づけられた機能的楽しみに還元し、快樂主義(Hedonismus)理論に似た遊戯的活動存在を明らかにしている。²⁶⁾

そして人間の遊戯の機能が多種多用であるとして、教育的な有用性の価値が遊戯に内在すると

いう方向で常に研究し、広義の意味での生活準備、人格形成、性格教育を遊戯にもとめようとしていることである。

2. 遊戯と国民性

グーツムーツによれば、個人の持つ欲求により、時には唯一の特徴的欲求から、「個々の人間の性格が理解できたり、更に、その国民全体の性格を認識する」²⁷⁾ ことができると考えた。例えば黒人の無教育で未熟な精神は、子供っぽい欲求から、見かけの美しいニュルンベルクのおもちゃに目を向け、ブランデーにおぼれ、のろいの言葉をまともに受け入れる者は、無教養な人間である。また装飾品や化粧品は、やたらと、ご気嫌うかがいのフランス人の欲求であり、迷信の雪白の聖人像をニュルンベルクから取り寄せるのはスペイン人の欲求であると述べている。

このことと同様に、遊戯から国民の性格が推論され、ある国民の洗練さや野蛮さなどの文化の程度もかなり明確に示される試金石であると考えた。

この関係については、すでにシラーが述べているが、²⁸⁾ シラーは、遊戯の違いと美の理想の追求の差を論じる例として挙げ、その理由は明らかなこととして省いている。グーツムーツは、文化の程度の深い関連から、遊戯の教育手段としての意味を導き出している。

遊戯に生じる喜びや楽しみは、人間のみならず、動物にもそなわった欲求であり、それ故に遊戯は全世界中に広まった現象であるばかりでなく、遊戯の伝播がきわめて広範囲に、すみやかに行なわれることも明らかにしている。²⁹⁾ そして遊戯は、あらゆる時代に、あらゆる民族、国民の老若の欲求としてあらわされてくる。このように欲求として存在する遊戯を生み出したり、受け入れたりする活動衝動の表出は、文化の洗練の程度に従い、時には身体的に、時には精神的に、又ある時には、両者が混って、遊戯の種類としてあらわされてくる。

例えば古代ゲルマン民族の生活が示すように、「人間や動物に対する武器の使用に疲れると、小屋に戻り、不快な時を寝て過ごしたり、さいころ遊びによって財産や自由をかけて遊んで過ごした。休息によって再び快活にされ、危険や食欲あるいは活動衝動が呼び起こされると、再び武器を取ったり、猟具を持って、戦闘的遊戯を始めた。」³⁰⁾ 野蛮な国民は、時代と場所を問わず、身体の運動と身体の休息の欲求から、戦闘遊戯 (Kriegerische Spiel) と賭博 (Hasardspiel) を好むとしている。

時代が進み、文化が高まると、遊戯や娯楽の重要な影響を、国民の性格や国民の幸不幸に見て取った支配者や思想家も多く、遊戯を重んじた。リュクルゴス (Lykurgos) は、スパルタ人の身体修練とダンスと社会の関連をまとめ、プラトンも同様にそれらを整えた。東ローマ皇帝コスティニアヌス (Justinianus) は、賭博を禁止し、跳躍、棒跳、槍投などの運動遊戯を奨励した。カール大帝 (Karl I. der Große) と聖ルートヴィヒ (Ludwig) は遊戯法を設け、フランスのカール五世 (Carl V) は、あらゆる賭博に反対する命令を与え、運動遊戯や身体修練を普及させた。ペーター大帝 (Peter, der Große) は、民衆がより社会的になるために、民族的娯楽を容認した。

このように、文明化された国民においても遊戯との結びつきが深くあり、国民の性格によって遊戯が選ばれると共に、他方積極的に遊戯が、国民の性格を形成するような関係も見られる訳であり、「国民全体の教育手段としての意味をもつ」³¹⁾ とグーツムーツは考え、カルタ遊戯 (Kartenspiel) の最悪の例³²⁾ を挙げながら、遊戯が「重要な瑣事」³³⁾ (wichtige Kleinigkeit) を改ためて指摘する。

3. 遊戯と労働

遊戯と労働の関係について、従来から、青少年は遊戯を求め、労働を軽視する故に、遊戯は青少年から労働する意欲を奪うという見解があった。グーツムーツは、この考え方には、全面的には反対しないが、次のように考える。若干の人々は、財をなし、十分に潤うために働くが、他の大部分の者は、胃袋を満たし、うわべだけを衣服で装って、家の中にいようとして、実際には何もせず、ただ楽しく過ごそうとするだけである。そのような者達に、運動遊戯のように身体修練を伴う活動が提供されても、おそらく彼らは骨折りと結びつく活動を嫌い、ただ楽しみが得られる活動だけを好むことになる。ここで必要とされるのは、習慣と熟練であって、それらによってはじめて快く活動することができる。グーツムーツは、労働する意欲を奪い労働ぎらいになるという原因は、遊戯にあるのではなく、「自然的な活動の誤った考慮に基づく教育の誤り」³⁴⁾から生じているとして、従来の教育が、青少年の欲求として遊戯に対する理解と、その自然的な活動の教育的価値を認識せず、その有用性に注目しなかったことが、「遊戯は、労働意欲を奪う」という見解に到ると批判を行った。

さらに、上述の見解とはまったく逆に、遊戯によって、青少年を刺激して、労働にかりたてることできるという見解には、グーツムーツは、「非常に悪い習慣」³⁵⁾と批判する。彼は、遊戯のために疲れそして労働することは、愚かで幼稚な考えであるばかりでなく、青少年にとっては、労働の目的を、遊ぶために働くとするのは、非教育的で無責任であると考えた。彼は、アリストテレスが「働くために遊ぶことは正しい」と述べたことを受けて、「勤勉であろうとするならば、遊ばねばならない」³⁶⁾と強調した。

そしてグーツムーツは、青少年には、「はじめに労働、それから遊戯」というものを不変の原則として生起させた。この結論は、産業革命を迎えつつあったドイツの社会状況の中で、台頭してきた中産市民階層の青少年を養成するために、「謹厳で実利的で合理的な市民的—民主的精神」³⁷⁾から導き出された一つの結論でもあった。

Ⅲ. 遊戯の教育的位置づけ

1. 遊戯の教育的役割

グーツムーツは、教育学の一つの科学を身体教育 (Leibeserziehung) であるとして、教育的体育 (Pädagogische Gymnastik) を「本来の体育運動」、「共同体的青少年遊戯」、「手工作業」の三つの領域として体育実践を進めた。が、ベルネットが言うように、遊戯教育は、バセドウにも見られるように、汎愛派の体育の重要な典型とみなされ、とりわけ、グーツムーツによる運動遊戯の再発見は、体育の理論と実践にとって注目すべき研究であり、汎愛派によって広範囲に発展させられた遊戯教育の一つの結論であった、³⁹⁾と評価される。

まずグーツムーツは、遊戯が人間の本性に基づくという認識で、青少年にとっては、最っとも楽しい事象であると同時に、身体的精神的特性に非常に適した一形態であると考えた。そして青少年の特性に適した方法論 (Methode) として、遊戯を身体と精神の修練と休養の観点から検討を加え、青少年の身心の発達に持続的な有用性をもたらすことを確信した。

まず青少年が戸外で、様々な運動遊戯を行なうことによって、健康の維持増進に役立ち、身体健康こそは、精神の澄んだ快活さをもたらす、「遊戯の保護と奨励により、祖国の若者の健康を養うのに貢献できる」⁴⁰⁾と述べる程である。そしておそらく変化に富んだ各種の遊戯は、青少年の日常生活に欠くことのできない欲求を満たし、快活な雰囲気を生み出す遊戯によって、学習意欲が高まり、元気を回復させられる。更に外界の様々な印象を受け取る感覚器官の修練と

鍛錬は、身体修練の重要な課題でもあるが、⁴¹⁾ 遊戯において方向と距離を見積ること、遊具の重さを測定すること、ボールを遊戯相手と観察し、指導者の指示を聞くことなどが肝要となり各感覚器官を十分に働かせるばかりではなく、観察力、注意力、記憶力、想像力などを修練する好機となり、それぞれの感覚が発達すると同時に、全体としてより高い認識力が養成される。そして、敏捷性、柔軟性、瞬発力、持久力などの身体的特性もおおいに高められるとしている。

しかしグーツムーツが最っとも重視した遊戯の教育的役割は次のことであった。すなわち、自由で快活な遊戯は、お互いの友情と平等さに結びつけられて行なわれ、共同体感情 (Gemeinschaftsgefühl) を呼び起こし、青少年の勇気、思慮深さ、名誉心などを様ざまにためしをして親切さや善の価値を理解させる。そして青少年の性格を陶冶させ、自我意識を高めた市民に成長することができる考えた。

将来、市民社会を支える者に求められる資質が、青少年期から、遊戯によって獲得されることを確信したと言える。

2. 遊戯の教育的効果

グーツムーツは、遊戯による教育的効果を以下のようにより具体的に九つの観点からまとめている。⁴²⁾

1) 精神の休養としての効果

仕事や授業の様な精神のまじめな緊張の後には、休養としての身体の健康や精神の快活さをもたらす遊戯、特に運動遊戯が、不可欠なものとなる。精神の修練と身体修練が相互に休養をはさんで行なわれることを教育の最大の秘訣があると考え、その休養に青少年の活動衝動が十分に運動遊戯によって満されることが重要であるとし、遊戯によってこそ可能となる。休養を取らず、活動衝動を無視すれば、柔弱さや不活発さや無気力さを身につけることになる指摘する。

2) 退屈さを避ける効果

退屈さは最っとも重苦しい悪の一つであり、多くの病気のように、不機嫌な人間を生み出す。過去に楽しみの経験を見い出せず、未来にも思いをめぐらさず、現在の瞬間の中にだけ行為するような青少年が、この退屈さという病気に苦しむと、⁴³⁾ グーツムーツは述べ、過去の苦しみの中に楽しさを見い出し、未来の喜びを見て取り、現在を楽しく過ごすためには、代用のきかない二つの伴侶 (Gesellschafter) が必要であり、一方は「まじめな仕事」であり、他方は「遊戯」によって退屈さを避けることである。

3) 青少年の自然的役割を助長する効果

労働やまじめな用件や大人との交際においては、青少年はあくまで、人為的役割を演じ、徐々に「変装した舞台衣装」で現われ、できる限り素顔を見せなくなる。これに対して遊戯においては、自己のあるがままの姿であらわれ、自然的役割をふるまい、青少年の真の性格が、容易にあらわされると同時にその助長への働きかけも可能となる。更には将来の生活ぶりの傾向も遊戯においてあらわされる。

4) 青少年の自然的知識欲を喚起する効果

教師が青少年の学問的関心を増加させるには、多くの教師が誤解しているように、彼らの内的な気質に原因を求めるのではなく、興味のわく活発な運動遊戯などを熱心に行なわせる時に、教師の助け人である「自然的知識欲」が喚起される。

5) 過度の敏感さの矯正の効果

繊細さや華美を求め、厳しく孤立した教育によって生じやすい過敏さは、より上流階層の青少年に多く見られ、繊細さの欠如や愚感さよりも悪いことであるとグーツムーツは批判し、社会生

活への適性にも欠けることを指摘する。この過度の敏感さを和らげたり、適当な場合の笑いを、やむを得ないとして、「男性的自制と率直さ」で耐えることを身につけさせるには、理性的な訓戒や説得に基づくよりも、様ざまの遊戯による方法が適切である。つまり遊戯で、冗談を通してまじめなことに慣れさせたり、からかわれたり、笑われたりすることを茶化した遊戯の世界で、まず耐えることを学ぶならば、過敏な青少年は、からかわれたり、笑われたりすることを、まじめな世界においても、簡単に受け止められよう。さらに戸外の運動遊戯も、過敏さを排除したり軽減したりするのに有効である。グーツムーツは、それを遊戯がもつ、「自然的機会」と呼んでいる。

6) 教師や教育者が、遊戯を通して、青少年に接近できる。

教師や教育者の常にまじめで、警告的な調子は、確かに尊敬と畏怖の念を喚起するが、青少年に自然で率直な親しみやすいおな心を開かせることは困難である。そこで教師や教育者は、彼らと共に遊び、彼らが、遊び仲間、つまり、教師や教育者ではなく、友人や遊戯のチームメイトと認めた時には、彼らはより自由に積極的にふるまい、その状態で、教師や教育者が、接近すればする程、その心を開く。そこには、学習の時には引き起こされないような注意をする機会を見出す。

つまり注意を与える者が、年令、身分で近ければ近い程、まったく同じであれば、その注意はより豊かなものとなる。また生徒同志の親しみを持っての静かにさせる注意は、教師や教育者の注意より、いかに多くのことを改善するか。この意味で、遊戯を共に行なうことによって、教師は「生徒の才能をしばしば、改めて見出し、教育の有効な機会を得る」⁴⁴⁾ ことができる。

しかし当時は、教師や教育者と青少年が共に遊ぶことを「スキャンダル」とか「無作法」とみなす見解が多くを支配していたが、グーツムーツは、多くの例⁴⁵⁾を引き合いに出して、理解しがたい誤りであると批判した。が、クルンプ(Klunpp, F. W.)のように、共に遊ばねば効果があらわれないとするグーツムーツの見解に様ざまの疑問と障害がある、⁴⁶⁾と指摘したことも見逃がしてはならない意見であるが、教師と生徒の相互の教育関係の機会としてもグーツムーツのこの見解は注目に値する。

7) 生活準備としての効果

遊戯は、青少年が、いかなる仕事や状況によっても達成されないような、人間の生活の歩みを、様ざまな形態で、詳細に模倣する機会を与える。青少年は常に少なからず大人の側から制限を受け、より自然にそしてより自由には、生活の歩みに同調して行動できないが、遊戯においては、少々の無礼、軽卒、不当な言行、自慢、だますこと、希望の失敗、不快な性格、遅鈍な頭脳、気どり屋、その他精神力や体力の優越などが容赦される。

そして遊戯を行なう仲間に、苦痛や心痛、喜びと楽しみの機会と好意、巧みさ、善などの評価の機会がもたれる。そこで青少年は「小川の中の小石のように」こすられ、みがかれることになる。

8) 青少年の間に、快活さ、喜び、楽しみとそして笑いを広げる。

グーツムーツは、全ての人間が常に楽しく愉快であれば、いかなる悪事も起こらないだろうと考え、怒りっぽい気まぐれは、善や愉快さの創造者ではないと考える。そして同じ純真さでも、常にまじめな性格は、まじめさと冗談と愛らしく混ぜられた性格よりも、道徳的には劣ると考えている。

性格の素質は先天的なものであるが、その形成は、教育の力であり、教育する状況にある。青少年を明るく、朗らかな調子に保ち、促進させるのに遊戯はきわめて効果をあらわすことになる。

つまり青少年が、笑い戯れれば戯れる程、そして自然的で愛すべきすなおさがあらわれる場を

許せば許す程、不愉快でなくなり、道徳的にも望まれない物静かで夢想的な無口から遠ざかり、身心共に成長することになる。

9) 身体陶冶としての効果

遊戯、特に戸外での運動遊戯は、健康の維持に有効で、身体の強化、修練、鍛練に効果があることは自明である。多くの柔弱者、憶病者、身体的に無精で不活発で未熟な者への遊戯の効果は、身体修練と並んで非常に高い。

以上のように遊戯の教育的効果を多少の重複を含めて九つの観点から述べ、実践的な有用性を確かなものとしている。

3. 遊戯教育の方法

〔1〕教育的遊戯の選択

遊戯教育に用いられる遊戯は、豊かな有用性と内容を持たなければならない、あらゆる遊戯が、教育手段となる訳ではなく、「意図した方法で行なわれた時に、利益ある修練とならねばならない」⁴⁷⁾と述べている。グーツムーツは、数多くの遊戯を実践しながら、「私は、読者に弁明をせねばならない程に多くの遊戯を投げ捨てた」⁴⁸⁾というように厳密な基準のもとに、教育の手段となりうる遊戯を特に、教育的遊戯 (Pädagogische Spiele) と呼んだ。この教育的遊戯の選択は、以下に挙げる、道徳的、身体的そして精神的特性に基づいて判断され、その特性を満さねばならないものとしている。

1) 教育的遊戯が持つべき道徳的特性

青少年の教育的遊戯は、まず無邪気なもので、正直で無作法でないもの。つまり「恥知らずの大人の間に見かけるいかがわしいことで興を添えるような不道徳なもの」⁴⁹⁾であってはけっしていけないが、きめられた場所と時間に、ルールに従っている笑いや騒ぎや大声で叫ぶことは不道徳ではない。更に上品さや美しさの感情を増すのに役立つもの。その他に青少年のための遊戯であるので、子供らしいものであれば少々のふざげや戯れも特性として含まれるが道徳的特性の基準は、遊戯の無邪気さである。

2) 教育的遊戯が持つべき身体的特性

教育的遊戯は、身体を大きくあるいは小さく運動させ、身体を健康を促進させるものでなければならない。そして走、跳、投が含まれ、楽しい笑いと冷静な運動によって行なわれ、敏捷性、力、柔軟性を肢体にもたらし、偶然あるいは意図的な苦痛に対して、身体を強化し、鍛練するようなものでなければならない。しかし鍛練のためでも、危険な遊戯は絶対に避けられねばならない。この点で戸外の運動遊戯の多くがふるい分けられた。

3) 教育的遊戯が持つべき精神的特性

青少年にとって愉快なもので、期待や名誉心を活発に刺激し、過敏さを柔らげると共に、忍耐を試し、慎重さや若々しい勇気を試すものでなければならない。更に人のもつ感覚を活発に刺激して、観察力、価値判断力、注意力、記憶力、想像力、機知などの修練となるものでなければならない。

以上三つの特性の選択基準にまったく適さず、排除すべきものが、「サイコロ遊戯」「カルタ遊戯」などの賭博である。特にグーツムーツは、カルタ遊戯に批判的で、封建主義社会秩序の道徳的頹廢に伴う付随現象として広まった遊戯であると決め、青少年を非常に長い間椅子にくぎづけにし、無口のままで時を過ごさせ、身体のためにも、精神のためにも、まったく何も達成させないばかりか、両者に非常に害を与えるものとして批判した。

教育的遊戯の選択基準で、グーツムーツはあらゆる時代とあらゆる国に存在する無数に近い種

類の遊戯の中から青少年の教育手段として有効であるようなものを選択しようとしたが、「ただそれだけで、完全に教育的遊戯の特性に適應する遊戯は見あたらなかった」⁵⁰⁾ このことから選択基準に照らし合わせ、試し、補充し、修正を加え、基準を満たし、1796年の『遊戯書』では、106種に及ぶ教育的遊戯が取り上げられた。⁵¹⁾ 運動遊戯58種目と座及び休息遊戯48種目であった。

〔2〕教育的遊戯の指導

シュネッペンタールの汎愛学校では、昼食後、天候のよい時には、戸外で一人の教師と監督者の指導の下で、楽しく教育的遊戯が行なわれていた。夕食の後にも、音楽やダンスの他に、自由な遊戯が行はわれ、生徒たち同志で、教育的遊戯が行なわれた。グーツムーツが、体育の指導を行なうようになってから、体育の授業の運動種目と同じように、非常に多くの教育的遊戯が生徒たちに指導された。その際にグーツムーツは、指導上の留意点を三つ挙げ、特に配慮すべきであると注意を促した。

1) 青少年の年齢、能力、知識、興味などについて十分な理解の上に、身心の發育発達に即して指導せねばならない。

2) 危険をおかす事への十分な配慮のもとに、生徒にできるだけ自主性にまかせ、自由に遊戯を行なわせ、休養の効果を高め、彼らの活動衝動を十分に満すようにする。教師や監督者は、ルールを正しく理解させたり、新しい遊戯を紹介する以外は、生徒たちの友人や仲間として遊戯に参加することが望まれ、彼らの自己活動や共同体感情に期待をする。

3) 自然的で、喜びや楽しさに満ちて行なわれるようにせねばならない。効果を期待するあまりに、強調したり強制したりすることは喜びや楽しさを失わずばかりか期待した効果も十分にあらわれ得ないことを理解せねばならない。

このような指導上の留意のもとに、各教育的遊戯が行なわれる際に、各遊戯ができるだけ正確に理解されることが重要と考え『遊戯書』に挙げられた106種のすべての遊戯は「実際の試みに基づいて、非常に詳細に叙述されてある」⁵²⁾ ものであり、又「まったく初めて見る人でも、十分に理解でき、行なえ、指導できる」⁵³⁾ ことを配慮して説明されている。

IV. おわりに

近代体育を形成していった汎愛派の最後の主張者といわれるグーツムーツのあらわした遊戯論は、従来日本の遊戯理論や遊戯説の系譜には登場することはなかったが、遊戯の本質と役割に関して教育的視点に基づき、実践経験から構築された独創的な遊戯論であったことから注目に値するものである。

遊戯の本質論そのものには、不十分な点や若干の誤謬を含んではいるが、遊戯の教育的目標、役割、効果、内容、方法そしてその実践等については、その後の遊戯教育へも大きな貢献が見られるし、今日もなお注目すべき点を含んでいる。

遊戯の本質論については、今日でさえ確固たる理論が形成されてはおらず、結局の所遊戯の側面の解釈なり、目的論に陥ってしまっている。その意味からすれば、グーツムーツは立場を明らかにして、遊戯と退屈な仕事、身心の緊張と休息、現存在の苦しみと喜びや楽しみの熱望といった正反対の中に人間の遊戯活動を見出し、近代社会への転換期という時代の流れの中で、道徳的、倫理的な価値を見失わずに、独創的な遊戯思想を明らかにし、最大の関心事であった、遊戯の教育的観点に立った理論的基礎づけと具体的実践法を明らかにしたことになる。

今後の課題は、その点で、具体的教材である106種の教育的遊戯の分析検討であり、彼の他の二編の遊戯に関する著作への理論的、実践的展開の考察である。

最後に、本研究を進めるにあたり、御指導、御援助いただいた、対馬清造教授には心より感謝申し上げたい。

注

- 1) 汎愛派 (Philanthropen) とは、18世紀末から19世紀初頭にかけて盛んであった啓蒙主義教育のドイツにおける特定の集団である (Göttler: Geschichte der Pädagogik, 1935)。社会共同的で愛国的で有用で幸福な生活を営む身心ともに健全な人間を育成し、この世に「繁栄社会」(blühende Gesellschaft)、「地上の天国」(Himmel auf Erden)を実現しようとする市民的世界観に基づき、その教育思想は、中世以来の封建的、教会的教育の理念や方法と正面から対立する進歩的な性格を持っていた(成田十次郎:近代ドイツ・スポーツ史 I, 昭和52年, 59頁)。バセドウ (Basedow, J. B), ザルツマン (Salzmann, C. G), カンペ (Campe, J. H), ジモン (Simon, J. F), ボイトラー (Beutler, H), アンドレ (Andre, C. K) そして「最後の汎愛教育者」とも呼ばれるグーツムーツ (GutsMuths, J. C. F) らが挙げられる。
- 2) Bennett, H.: Die pädagogische Neugestaltung der bürgerlichen Leibesübungen durch Philanthropen. 1965. s. 9
- 3) 正式な表題は, Spiele zur Übung und Erholung des Körpers und Geistes, für die Jugend, ihre Erzieher und alle Freunde unschuldiger Jugend Freuden, Schnepfenthal, 1796 (青少年, その教育者そして無邪気な青少年の喜びのすべての友人たちのため, 身体と精神の修練と休養のための遊戯) であるが, 慣用的に『遊戯書』(Spielbuch) と呼ばれており, 本研究もこれを用いる。
- 4) 『遊戯書』を『青少年の体育』より, さらに古典的であると評価している者も少なくない。(例えば, Bartholome, F.: Kurze Geschichte der Pädagogik, 1911. s. 170)
 またグーツムーツ自身も自伝の中で述べているように, 遊戯書の初版は, その年(1796年)に売切れ, ただちに2版が出版されたが, 第3版(1802年)も数年で完売してしまったというように『遊戯書』が『青少年の体育』にくらべ, より多くの部数を出版したことは確かであった。なお今日までの『遊戯書』の出版経過は以下の様である。
 - 1796年 初版 Schnepfenthal, XVI. 492 s.
 - 1796年 2版 (初版売切のため増版)
 - 1802年 3版 Schnepfenthal, XXII. 493 s. (銅版画1頁と16の小図表)
 - 1845年 4版 Stuttgart, VI. 360 s. (F. W. Klumppの序文)
 - 1878年 5版 Hof XII. 395 s. (O. Schettlerにより4版の序文の改訂, 編集)
 - 1884年 6版 Hof XVI. 526 s. (O. SchettlerによりJ. C. Lionの協力により4版の序文の改訂, 編集)
 - 1885年 7版 Hof XVI. 552 s.
 - 1893年 8版 Hof XVII. 560 s. (J. C. Lion編集 45の図表)
 - 1914年 9版 Hof XII. 424 s. (G. Thieler編集 57のさし絵)
 - 1959年 10版 Berlin XXXXII 429 s. (初版の復刻版, W. Beier編集, P. Marschnerの序文, 注釈とさし絵)
- 5) Marschner, P.: Vorwort, in Spiele zur Übung und Erholung des Körpers und Geistes, von GutsMuths, Q. D. K. 1959, s. IV.

- 6) GutsMuths. : Gymnastik für die Jugend. 2Aufl. 1804, in Studententexten zu Leibeserziehung, Bd. 7, 1970, s. 21—23
- 7) GutsMuths. : ebenda, s. 30
- 8) GutsMuths. : ebenda, s. 31
- 9) GutsMuths. : Spiele zur Übung und Erholung des Körpers und Geistes, Berlin 1959, s. XXI
本研究では、Wilhelm Beier 編集の初版復刻版、Quellenbücher der deutschen Körperkultur, Sportverlag, を中心に用い、必要に応じて、4版、F. W. Klumpp 編集、1845年を参照するものとした。
- 10) Höhne, E. : GutsMuths' Gedanken über das Wesen und über die Wirksamkeit der Körpererziehung, in DHfk. Jahrgang. 1959. / 60. H. I. s. 28.
- 11) Marschner, P. : Vorwort, in Spiele …… a. a. O. s. III.
- 12) Bernett, H. : Die pädagogische Neugestaltung …… a. a. O. s. 69.
- 13) GutsMuths. : Spiele zur …… a. a. O. s. XXIII ~ XXIV
- 14) GutsMuths. : ebenda, s. 1 .
- 15) GutsMuths. : ebenda, s. 2 .
- 16) GutsMuths. : ebenda, s. 1 .
- 17) GutsMuths. : ebenda, s. 1 .
- 18) シラーのこの論文は、『遊戯書』の出版される前年1795年に文芸雑誌『ホーレン』(Horen)に分割掲載されたものである。シラーはフランス革命の成功や祖国の政治的経済的状况をかんがみて、カント美学を背景にして、感性と理性、自然と精神とを融合せしめる人間の美的性格を養い、美的人間による自由で美的な国家形成をめざした。それはまさに時代の要求でもあった。そして人間の本来もつ感性と理性から生じてくる、感性衝動と理性衝動の調和的な従属関係をもたらすものが、「第三の根本衝動」としての「遊戯衝動」(Spieltrieb)である。この遊戯衝動はより高次的な衝動であると共に、真に人間的な唯一の根源的衝動である。つまり完全に無目的で、非合理的であるが、最っとも本質的であると考えられ、「人間は、彼が語の完全な意味において、人間であるときにのみ遊戯し、また人間は、彼が遊戯するところにおいてのみ完全に人間である」という命題を生起させた。(Schiller, F. : Über die ästhetische Erziehung des Menschen; in Philipp Reclam Jun. 1970)
グーツムーツは『遊戯書』においては、シラーの名前を一度も挙げず、「遊戯衝動」という語も用いていないので、シラーの論文を読んだかどうか明確ではないが、当時のシラーの知名度、シラーの演劇へのグーツムーツの関心の高さ、有用性の考え方、国民と遊戯の関係などは、シラーに負っていると思われるし、『ホーレン』第1号4巻のWeisshuhnの「厳密な意味における遊戯」と題する論文も読んでいると思われる。
- 19) Neuendorff, E. : Geschichte der neueren Deutschen Leibesübungen vom 18. Jahrhundert bis zu Gegenwart, Dresden, Bd, I, 1930. s. 290 ~ 291
- 20) GutsMuths. : Spie zur …… a. a. O. s. 1 .
- 21) GutsMuths. : ebenda. s. 29.
- 22) GutsMuths. : ebenda. s. XX1 .
- 23) GutsMuths. : ebenda. s. 2 .
- 24) GutsMuths. : ebenda. s. 2 .
- 25) GutsMuths. : ebenda. s. 4 .

- 26) Höhne, E. : GutsMuths' Gedanken …… a. a. O. s. 55.
- 27) GutsMuths. : Spiele zur …… a. a. O. s. 7.
- 28) Schiller, F. : über die ästhetische …… a. a. O. s. 62.
 ギリシアのオリュンピア祭で、力、敏捷性、しなやかさ、高尚な才能の競演が楽しまれ、ローマでは、剣闘士や猛獣の死闘が展開されたことから、ヴィーナスやアポロの理想形態が、ギリシアにおいてしか求められない理由が明かとなり、それぞれの国民の興味の細かな相違から、ロンドンの競馬、マドリードの闘牛、昔のバリの見世物、ベニスのゴンドラ競漕、ウィーンの狩猟などの説明ができようと述べている。
- 29) ポリネシアの遊戯がドイツに伝えられることよりも、農器具の工具や改善のような有益な発明が、隣接したある国から他の国へ伝えられることの方が、どれだけ困難なことであるのか。また、ドイツの少女は、その起源は知らなくともギリシア時代と同じ五つ小石の遊戯を行ない、少年達は、ギリシア人が、Kindalismusと呼んだものを、Pflocken (くさびどめ) と名づけて行っている。更にシュトレブケの農夫は、アイスランドのエッケルンの農夫と同じようなチェスを行ない、ラップ人は、パリやベルリンの工場で作るようなカルタの図をトナカイの血で、ドイツトウヒ材の樹皮に描いて遊ぶ。(GutsMuths. : Spiele …… a. a. O. s. 5)
- 30) GutsMuths. ebenda. s. 8.
 タキトウス、田中秀央、泉井久之助共訳、ゲルマーニア、岩波文庫、昭和47年、63頁。
- 31) GutsMuths. : ebenda. s. 14.
- 32) 14世紀末に考案されたカルタ遊戯 (Kartensspiel) (トランプ) が、シャルル6世の娯楽として宮廷に紹介されるや、このささいな遊戯が、フランスをはじめ、スペイン、イタリアなどのヨーロッパ全土に広まり、より良い運動、狩猟、ツルニール、ボール遊戯、木球遊戯などが駆逐され、国民、特に上流階層の心身の虚弱化を促進させた。
- 33) GutsMuths. : Spele zur …… a. a. O. s. 11.
- 34) GutsMuths. : ebenda. s. 25.
- 35) GutsMuths. : ebenda. s. 26.
- 36) GutsMuths. : ebenda. s. 26.
- 37) Berneff, H. : Die pädagogische Neugestaltung …… a. a. O. s. 25.
- 38) Bernett, H. : ebenda s. 67.
- 39) Marschner, P. : Voxwort, …… a. a. O. s. XI.
- 40) GutsMuths. : Spiele zur …… a. a. O. s. XXI.
- 41) GutsMuths. : Gymnastik für die Jugend, …… a. a. O. s. 252 ~ 272.
- 42) GutsMuths. : Spiele zur …… a. a. O. s. 14 ~ 23.
- 43) GutsMuths. : efenda. s. 17.
- 44) Klumpp, F. W. : Vorwort des Herausgebers, in Spiele zur Übung und Erholung des Körpers und Geistes, von GutsMuths, 4 Aufl. 1845. s. 7.
- 45) エベソス (Ephesus) のアルラミス神殿 (Dianentempel) で少年と遊戯を共に行ったヘラクリート (Heraklit), 青少年と共に遊戯したソクラテス, ボールで遊んだ, ユリウスカエサル (Julius Caesar), オクタビウス (Octavius), 小さな孫に公共の場所で笛をなおしてやったメディチ (Cosimo vor Medici), 将官と共に目隠し鬼をして遊んだアドルフ (Gustav Adolf) などの例である。
- 46) Klumpp は、あくまでも教師としての立場から、十分に青少年の遊戯に関与できると述べた。その理由として、まず教師は、生徒を倫理的に監督しなければならない。そして教師は遊戯を奨励

し指導しなければならない。また教師は生徒にできるだけ運動の自由と自己活動を許さねばならないとしている。Klump は GutsMuths の見解に直接的に批判を加えているのではなく、共に遊ぶことについて消極的に考えているからである。つまり、若く、健康で、必要な身体的能力と敏捷性、若々しい精神的新鲜さと柔軟さを持った教師は、共に遊戯に参加できるが、病弱であり身体的に強くなく、まじめで厳格な性格の教師は、共に遊ぶことはできず、教授し、警告し、罰する教師が、一転して、青少年と共に遊ぶ仲間に移ることは、一般的に全てにあてはまるものではないと述べる。結局、Klump は、青少年と共に遊戯を行ってはいならないと考えたのではなく、いっしょに行なえない教師のための十分な配慮がグーツムーツには欠けていたことを指摘したことになる。

47) GutsMuths.: Spie zur …… a. a. O. s. 32.

48) GutsMuths.: ebenda. s. 31.

49) GutsMuths.: ebenda. s. 32.

50) GutsMuths.: ebenda. s. 33.

51) 106種というのは、ページ数の関係で最大限という数であって、グーツムーツ自身は、まだかなりの数の遊戯を持ち続編を出版する予定をしていた。

GutsMuths.: ebenda. s. 33.

52) GutsMuths.: ebenda. s. XXIV.

53) GutsMuths.: ebenda. s. XXIV ~ XXV.

54) グーツムーツは、本研究で用いた『遊戯書』以外に以下の二つの著作を著わしている。

◦ Spielalmanach für die Jugend, 1802 ~ 1803

◦ Unterhaltungen und Spiele der Familien zu Tannenberg, 1809.

グーツムーツの遊戯論 (その1)

—『遊戯書』における思想と教育的基礎づけ—

1796年に、体育史上、「近代体育の父」と称される J. C. F. GutsMuths は一冊の遊戯書を著した。その遊戯書は、体育的そして教育的観点に基づいた最初の遊戯書であると評価されている。彼はその著で、中世教育への批判を明らかにするとともに、同時に新しい社会の担手である青年の教育方法をさし示した。

本研究は、そのグーツムーツの遊戯思想と遊戯の教育的役割や内容を明らかにする課題をもつ。結論としては以下のものである。

- 1) グーツムーツは遊戯に関して独自の定義づけを試みた。その際に彼は哲学的立場と習慣的立場、すなわち、一方は、理論的な定義づけであり、他方は、実践的定義づけを行った。
- 2) 彼は遊戯の意味(義)を国民性との関連で指摘している。彼は、国民教育の一方法として重要性を導いている。
- 3) 彼は遊戯の教育的役割を指摘すると同時にさらに、道徳的、政治的役割も明らかにしている。
- 4) 彼は、教育的に有用な遊戯を、特に「教育的遊戯」と呼んでいる。彼は教育的遊戯の選択基準を定めた。すなわち一定の道徳的、精神的そして身体的特性であり、彼は遊戯書で106種の遊戯を挙げている。

- 5) この106種の教育的遊戯は、すべて実際に、彼自身によりたしかめられ、各遊戯の価値も確認された。
- 6) 彼は遊戯の実施のしかたを詳細に説明し、指導法、留意点も説明している。それはすべての青少年が、容易に遊戯を実施することができたためであり、また、すべての教師や両親らが、遊戯を効果的に指導しやすくするためであった。

GutsMuths' theory of plays and games. (No. 1)
—His thought and educational fundation in "Gamebook"—

In 1796, J. C. F. GutsMuths, who was called the father of modern physical education in the history of physical education, wrote a book on plays and games. This book is estimated as the first book on the modern physical and educational aspect of games and plays. In the book he criticized the old-fashioned notion of games and plays of the Middle Ages and suggested new educational ideas for younger generations.

The aim of this study is to clarify GutsMuths' thought on games and plays as well as its educational role and contents of plays and games.

The following are some of my observations :

- (1) GutsMuths' definition of games and plays is unique in the sense that he classify them into philosophical one and customary one ; the former leads to be theoretical, the latter practical.
- (2) He has indicated the significance of plays and games in terms of national traits. He also put emphasis on the significance as a means of national education.
- (3) Not only educational merits but moralistic and political merits are pointed out.
- (4) He has called the game with educational merit 'educational game' and proposed criteria for selection : criteria of moralistic, spiritual and physical characteristics. There are 106 kinds of games and plays in his book.
- (5) These 106 kinds of educational games have all been actually tested by himself and each value of games has been thoroughly confirmed.
- (6) He has explained in detail how to instruct plays and games so that teachers and parents might easily get clues to let young generations enjoy them effectively.